

国際経済学 1 の講義内容を前提として、さらに国際経済の理論及び現実経済への応用的側面も扱いながら、より社会を深く観る目を養うことを目的とする。前期にやり残したヘクシャー＝オリーマン・モデル等の貿易の基礎理論、それらを用いてのある国々の経済成長や援助等の所得移転、関税等の貿易政策がその国や他の国々にどのような影響を及ぼすかの分析、さらに、発展途上国の貿易政策、先進国の産業貿易政策等(時間が余ればその他のトピックス)等を扱う予定。その際、貧困国側の視点にも触れて見たい。国際経済学 1 と 2 は連続した講義である。国際経済学 1 を受講していない場合は、ミクロ経済学の基礎とリカードモデルのきちんとした理解(下記準教科書①の 2 章まで)があることを前提とする。

<評価方法> 成績評価は学期末試験による。

<準教科書>

①クルグマン・オブズフェルド著(石井・浦田・竹中他訳)『国際経済—理論と政策：I 国際貿易』第 3 版、新世社。→3、4、5、6、9、11、12 章

*クルグマン・オブズフェルド著(山本他訳)(2010)『クルグマンの国際経済学—理論と政策(原著第 8 版):上巻 貿易編』、ピアソン桐原。→訳に間違いが多い。

*Krugman, P. R. , Obstfeld, M. and Melitz, M. (2011), *International Economics: Theory and Policy*, 9th Edition, Prentice Hall.

②Ray, D. (1998), *Development Economics*, Princeton University Press.→ch.17 (18)

(特に発展途上国の貿易政策について)

※この章だけのコピーを 3 部、私の研究室においておきます。オフィスアワー(木曜日 3 時～5 時)等に来てくだされば、一日以内で御貸しいたしますので、コピーをしてください。本格的に経済発展論を行う人には全体が良い本ですので購入もお勧めします。

<参考書>

③クルグマン(山岡洋一訳)1997 年『クルグマンの良い経済学、悪い経済学』日本経済新聞社(Krugman, P. 1996, "Pop Internationalism," MIT press)。⇒日経ビジネス人文庫から文庫本も出ている(780 円)

④石川 城太・菊地 徹・椋 寛(2007)『国際経済学をつかむ』有斐閣。

→国際貿易論に焦点を当てた国際経済学の初級入門書。そのエッセンスを 8~10 ページの「ユニット」ごとにまとめ、数式をできるかぎり用いずに図や身近な具体例を用いて丁寧に解説。IT や環境政策が貿易に与える影響など、最新かつホットなトピックも充実。

⑤ケイプス・フランケル・ジョーンズ著(伊藤隆敏監訳、田中勇人訳)(2003)『国際経済学入門：①国際貿易編』第 9 版、日本経済新聞社。

→国際経済学の第一人者 3 人によるスタンダードなテキスト。様々なトピックを扱う包

括的なテキストで、新しい課題や理論も取り込んでいる。

⑥木村福成『国際経済学入門』日本評論社。

⑦矢野誠（2001）『ミクロ経済学の基礎』岩波書店

→ミクロ経済学の考え方を理解するには最適。

- ・その他講義の際に適宜紹介する。

<予定>

1. 特殊要素と所得分配:→①3章、⑤6章。

- ・貿易の政治経済学の基本的理解（なぜ保護貿易が生じるか）。

2. 資源と貿易Ⅰ：ヘクシャー＝オリーン・モデル→①4章。③3,4章。⑥3章。

3. 資源と貿易Ⅱ：ストルパー・サミュエルソン効果とリプチンスキー効果→同上

4. 資源と貿易Ⅲ：→同上。

- ・先進国内の国内貧富の差の拡大は第三世界との貿易が原因という俗説は本当か？

5. 国際貿易の基本モデルⅠ：交易条件→①5章

6. 国際貿易の基本モデルⅡ：→①5章

- ・経済成長、国際所得移転（海外援助、戦後賠償）、貿易政策の影響

7. 規模の経済と国際貿易Ⅰ：産業内貿易→①6章③6章④3章

8. 規模の経済と国際貿易Ⅱ：外部経済と国際貿易→①6章③6章④5章

- ・動学的収穫逓増、幼稚産業保護論

9. 国際貿易の厚生効果と貿易政策→①9章④4章

- ・関税、輸出補助金、輸入割当、輸出自主規制、ローカルコンテンツ規制

10. 発展途上国における貿易政策Ⅰ：輸入代替工業化政策→②17章（①11章）

11. 発展途上国における貿易政策Ⅱ：輸出促進工業化政策→②17章（①11章）

12. 発展途上国における貿易政策Ⅲ：事例紹介→②17章（①11章）

13. 14. 先進国の産業貿易政策：戦略的貿易政策、事例紹介→①12章④5章

※より詳細かつ厳密な議論を知りたい方は、⑥9章を参照。ただしこの部分を完全に理解するには、ある程度の経済学の素養を必要とする。

(補足)

国際経済学の分野としては、国際経済学1、2の上記で扱った領域以外に、国際金融（オープンマクロとも言われ国際収支、為替レートの決定理論等を含む）の領域がある。時間があれば扱いたいが多分無理であろう。独習される方は下記の本をお勧めする。

→ケイブス・フランケル・ジョーンズ著（伊藤隆敏監訳、田中勇人訳）（2003）『国際経済学入門：②国際マクロ経済学編』第9版、日本経済新聞社。

→クルグマン・オブズフェルド『国際経済—理論と政策（第3版）—Ⅱ国際マクロ経済学』新世社。（クルグマン・オブズフェルド著（山本他訳）（2010）『クルグマンの国際経済学—理論と政策（原著第8版）：下巻 金融編』、ピアソン桐原。）